芸文 TOPICS

「芸能文化科で得た『宝物』」

川崎　真広（芸能文化科 15 期生）

芸能文化科 15 期生の川崎真広と申します。

私が芸能文化科を志望した理由は、中学３年生の当時、声優という職業に憧れていたことに由来します。

夢を叶えるために演技の勉強がしたいと思った私は、「ここなら演技について貴重な経験が積めるのでは」と考え、芸能文化科を受験しました。

入学後は落語、箏曲、能・狂言、演劇、芸能の歴史（起源から現代芸術まで）と、芸文ならではの様々な事柄を勉強し、文化祭や新入生歓迎会、卒業公演などの演目にも積極的に参加しました。

思い出深いのは、その中で学んだ内容もさることながら、やはり仲間であるクラスメイトとの時間でした。芸能文化科は１学年に１クラスですので、必然的に１年生の時に出会ったクラスメイトと３年間一緒に過ごすことになります。気の置けない親友も、ちょっと馬が合わない子なんかも、ずっと一緒のクラスです。

しかしこれが最高でした。15 期生みんなで行事ごとに取り組むたびに、色んな“壁”にぶつかりました。時には友達ともぶつかりました。自分のいいところ、悪いところを教えてくれる仲間を見つけることが出来ました。その仲間とファストフード店で漫才や演劇の脚本を作ったり、人間関係のことで相談をしたり。

3 年生になって卒業公演の練習では、１、２年生の時にちょっとキャラが合わなかった子と、コンビでコントをやったりしていました。

その後は関西大学文学部へ進学。物流会社で 4 年間働いたのち地元の工場へ転職と、芸能分野とは関わりの薄い仕事をしていますが、芸能文化科で身についた感性、絆を深められた仲間たち、その仲間のおかげで気づけた自分自身の良い所、悪い所。どれも今の自分にとっては「宝物」です。そんな「宝物」を、これから先の長い人生でも、大事にし続けたいと思っています。

「人生を開く仕事と出会い」

大倉　千史（芸能文化科 3 期生）

私は芸能文化科の 3 期生としてお世話になりました。

在学当時はそこまで意識しなかったのですが、芸能文化科の友達は家族より長い時間を過ごした貴重な仲間です。一つの舞台をクラスで作り、力を合わせて本番を乗り越えた経験は他ではできません。多感な時期のその経験があったからこそ、現在久しぶりに会っても色々と話すことがあり、大人ぶったり遠慮などもなく本当に良い関係性を築けていると思います。

芸能文化科の授業の中に舞台美術という科目があります。2 年生でデザインについて、3 年生の時に大道具の実習がありました。デザインの授業では、今まで描いたことのない空間に物を置いていくという概念で絵を描いていきました。

また、テレビと舞台の美術の違いについても学びました。今まで意識もせず、なんとなく見ていたものが講義の中ではっきり形になっていくのでとても勉強になったと思います。

大道具の製作ではセットに使えそうな箱をみんなで作ったり（現在も貼り替え、塗り替えて生徒さんに使って頂いています）、背景で大きなパネルにレンガの絵を描いたりしました。とても楽しかったことを覚えています。

卒業発表会では今後の人生に関わる背景というお仕事と出会い、その後先生方の協力を頂いて背景のお仕事に携わる事ができました。当時は就職氷河期の中、USJ の建設やロングランとなるミュージカルの開幕など舞台や娯楽の革命的な出来事が多く始まりました。

現在、まさか自分が舞台美術の講師として務めさせてもらうことになるなんて…！と驚いてから、はや 10 年目。あっという間でしたが、今も昔もハケを使って水性の絵の具で大きな絵を描く。プロジェクションマッピングや新しい機構ができ技術は多少変わってきましたが、これからも基本から、なるべく多くの事を生徒たちに伝えることができたら、と思っております。